令和２年度　学校評価実施報告書

京都市立伏見南浜幼稚園

教育目標
心豊かにたくましく生きる子ども　～生涯にわたる人格形成の基礎を培う～

年度末の最終評価	
自己評価	教育目標の達成状況，次年度に向けた見直し ・安心感・教師との信頼感を感じ，まずは一人一人が自分の『ありのままの思い』を表し，安定感をもって園生活を送ることができた。また，他者との多様な関わりを経験し，他者との深い関わりを結ぶ契機となった。 ・特に今年は制約が多い中ではあったが，教職員の工夫や保護者地域の協力を得て，様々な体験を形を変えて行うことができ，子どもたちの豊かな育ちにつながった。
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 ・子どもたちは安定感をもって，園生活を送り，保護者も安心感を持っていることが感じられる。 ・多様な子どもたちを受け入れることにより，子どもたちの育ちが深まっている。 ・今後，地域行事等が再開できるようになったら，さらに直接的な子どもや保護者との関わりがもてるようにする。 ・通常に活動が行えない場合でも，また今年度のように，方法や場所などを変えて，出来る限り，『こころ』のつながりができるように支援していきたい。

学校関係者評価の評価日・評価者

	評価日	評価者
中間評価	Ｒ２・１０・２９	学校運営協議会（紙上にて）
最終評価	Ｒ３・３・１７	学校運営協議会（紙上＋聞き取り）

（１）幼稚園教育（保育の改善・充実）について

具体的な取組

一人一人の子どもが“ありのままに”感じ・表すことができるように，日々の保育の見直しや保護者との連携を，さらに深めていく。

その中で，子どもたちが

＊自然への関心を高める

＊多様性を認める

＊主体性を高める　ことができるようにする。

そのために『マインドフルネス』に注目し，一人一人の子どもの『今，この瞬間』がより充実できるような，援助や環境構成に努める。今年度は特に，次のような視点で保育を見直す。

○活動の中で，一人一人の子どもの『感じる・表す姿』をより丁寧に読み取る。

○『マインドフルネス』の状態になるための環境・活動の工夫をする。

（取組結果を検証する）各種指標

・日々の幼児の姿の変容やエピソード検討

・保護者アンケート『園生活の中で，どのように成長したか』

・保護者アンケート『教職員や友達と一緒に過ごすことを楽しんでいるか』

中間評価

各種指標結果

・日々の幼児の姿の変容やエピソード検討

園内研修や日々の保育後の振り返りの中で，毎日の子どもたちの姿を見直し，一人一人がどのような場面で『夢中』になっているか？自らありのままの姿を表しているか？について話し合うことができた。

・保護者アンケート『園生活の中で，どのように成長したか』

・保護者アンケート『教職員や友達と一緒に過ごすことを楽しんでいるか』

両質問とも 100％の保護者がそう思うと答えられた。

自己評価	分析（成果と課題） ・コロナ禍にもかかわらず，子どもたちは安定して過ごす姿や，まずは“ありのまま”の姿を表す姿がよく見られた。 ・特に年長児では粘り強く取り組むこと，年中児では友達と一緒に過ごす中で，少しずつ『一体感』を感じること，年少児では幼稚園に来ることが楽しくなり，自分でしようとするようになってきたことなどがみられるようになってきている。
	分析を踏まえた取組の改善 ・今後さらに，一人一人が「夢中」になる環境作りや，一人一人が『多様性』を認め合える関係作りを進めていきたい。
	（最終評価に向けた）取組の改善を検証する各種指標 ・日々の幼児の姿の変容やエピソード検討 ・保護者アンケート『園生活の中で，どのように成長したか』 ・保護者アンケート『教職員や友達と一緒に過ごすことを楽しんでいるか』
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 ・園の様子を，今回は直接的にみることはほとんどできなかったが，アンケートや園児の登降園時の様子をみて，安定感を感じる。 ・今後，コロナ禍においても，登降園時の見守りや，相談などの支援を行うことができる。

最終評価

（中間評価時に設定した）各種指標結果

・日々の幼児の姿の変容

昨年度に比べ，より多様な子どもたち同士の関わりの中で，思いの『共有』とともに『衝突』も経験することができた。その中でより『ありのまま』の思いを表し，相手の気持ちにも気付く姿がみられた。

また特に年長児においては，自分とは考えや思いが違う他者と折り合いをつけて，共に『楽しく』生活できるように考えたり工夫したりする姿がみられるようになってきている。

・園内研修などにおけるエピソード検討

全般を通して，子どもや保護者の方の表に現れて姿だけではない，内面の動きや真意を捉えられるよう，日常的な教職員間の『話し合い』を活発に行うことができた。

また３つのキーワード（自然への関心・多様性・主体性）を意識しつつ,『マインドフルネス』に注目し，エピソードを見直したり，日々の保育や子ども姿の見直しを行うことができた。

・保護者アンケート『園生活の中で，どのように成長したか』

100％の保護者がそう思うと答えられた。

・保護者アンケート『教職員や友達と一緒に過ごすことを楽しんでいるか』

100％の保護者がそう思うと答えられた。

自己評価	分析（成果と課題），重点目標の達成状況，次年度の課題 ・園内研修は「毎日が園内研修の場である」その中で，子どもたちの『夢中』を引き出す教師の援助や環境構成についてのいくつかのキーポイントをリーフレットにまとめることができた ・保護者の方々は子どもたちの成長を，〇〇ができるようになったという具体的な行動面だけではなく，人との関わりや意欲，感情のコントロール力などの育ちも感じておられた。 ・今年度は保護者の保育参加を行うことが困難な状況が続いたが，来年度以降可能な状況となれば，子どもの内面理解や関わる力の育ちなどを保護者の方々が実感していただける機会をもつ
	分析を踏まえた取組の改善 ・教師の援助や環境構成の留意点を，さらに丁寧に捉えなおし，教職員間での連携を強める ・今年度は保護者の保育参加を行うことが困難な状況が続いたが，来年度以降可能な状況となれば，子どもの内面理解や関わる力の育ちなどを保護者の方々が実感していただける機会をもつ
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 ・保育の充実は，幼稚園の根幹となるものであるため，教職員が保護者の方々と連携して，取り組めるように援助し続ける。 ・保育に使用する，製作素材の提供や，飼育栽培活動の支援などを引き続き行う。

（２）幼小連携・接続に関して

具体的な取組

・「学びに向かう力」の育ちの姿を幼稚園以外の関係者にも分かりやすく発信する。

・引き続き，２回以上の教職員の合同研修や，４回以上，互いの授業や保育を見る機会を設ける。

（取組結果を検証する）各種指標

・「学びに向かう力」の育ちの姿に関するエピソードの数

・幼小合同の研修の回数

・アンケート項目

『自分の気持ちを伝えようとしているか』　　『好奇心をもって遊んでいるか』

中間評価

各種指標結果

・「学びに向かう力」の育ちの姿に関するエピソードの数

コロナ禍において２か月の休業期間も，14 エピソードをもとに育ちを検証し，各学年に必要な，

援助について学び，実践に生かした。

・幼小合同の研修の回数

集合研修をもつことはできていないが，幼稚園での個々の子どもの育ちを伝えたり，環境の工夫や，活動の切り替え時の援助などを伝え合っている。

・アンケート項目

『自分の気持ちを伝えようとしているか』　　『好奇心をもって遊んでいるか』

『コロナ臨時休業中の園の取組は有効でしたか？』

全質問とも 100%の保護者がそう思うと答えられた。

自己評価	分析（成果と課題） ・長期の臨時休業があったにもかかわらず，安定感をもって園生活を送ることができている。休業中の園からの様々な発信や支援，保護者の方との双方向の取組などにより，園との関係を持続することができた。これらのことが，子どもたちの『学びに向かう力』（特に安定感・好奇心・思いを表す力）につながっている。 ・入学後の１年生の授業を参観し，教師間での話し合いを行うことができた。また，場や教材の使用や交流を昨年に引き続き行っている。
	分析を踏まえた取組の改善 ・さらに『自ら考え，判断する力』『相手と思いや考えが違う時，自分の思いを十分に表すとともに，折り合いをつけようとする力』を高められるような保育を行う。
	（最終評価に向けた）取組の改善を検証する各種指標 ・「学びに向かう力」の育ちの姿に関するエピソードの数 ・幼小合同の研修の回数 ・アンケート項目 『自分の気持ちを伝えようとしているか』　　『好奇心をもって遊んでいるか』
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 ・幼小連携は，実際に子ども同士の交流は難しいが，教師の交流や，学校の場の使用による交流を進めていってほしい。 ・伏見南浜学区以外の子どもも増えてきている状況の下，南浜小学校との連携を核として，他の学校へ進学する子どもの安心感も，高めていってほしい。

最終評価

（中間評価時に設定した）各種指標結果

・「学びに向かう力」の育ちの姿に関するエピソードの数

保護者の方に育ちを伝えるエピソードも含めて，各学年で６以上のエピソードを取り上げ研修することができた。

・幼小合同の研修の回数

合同に行うことは難しい状況にあったが，話し合いや打ち合わせも含めて３回行うことができた。また日常的に個別の事案についての連絡や相談を密にすることができた。

・アンケート項目

『自分の気持ちを伝えようとしているか』

100%の保護者がそう思うと答えられた。

『好奇心をもって遊んでいるか』

98%の保護者がそう思うと答えられた。（58 名/全園児 59 名中）

自己評価	分析（成果と課題），重点目標の達成状況，次年度の課題 ・例年通りの園児と児童の交流を行うことは難しかったが，テレビ会議システムを用いたり，園児の製作を届けたりして，子ども同士の思いをつなげる取組は行うことはできた。 ・教職員の合同研修を行うことは難しかったが，修了児の育ちを小学校へつなぐ取組や，園の子どもたちの育ちの様子伝える取組は例年以上に丁寧に行うことができた。その中で，進学にむけての，園での援助の在り方についても協議を行うことができた
	分析を踏まえた取組の改善 ・今年度の状況が継続した場合においても，『密』を避けて行える方法，ICT を用いた交流などの方法で新たな形の『幼小交流』を行う。 ・修了児の育ちをより円滑に引き継ぐために，また園での援助の在り方を見直すために，次年度は夏休みの時期から小学校の教職員との研修の機会をもつ
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 ・本年度は地域行事を行うことができなかったが，南浜の『伝統』は変わることはないので，栽培活動や製作活動，生活科の活動などを通しての幼小交流の支援を続ける。

（３）預かり保育に関して

具体的な取組 ・日常的な担当教員と教職員との話し合いの時間を確保する。 ・課題については，具体的な解決に向けての援助を明らかにし，実行に移す。 ・定期的に，預かり保育の環境を見直す。
（取組結果を検証する）各種指標 ・アンケート項目『預かり保育は子育て支援として役立っていますか』 ・預かり保育での，子どもの育ちの姿の検証 ・預かり保育指導計画の見直しを進める

中間評価

各種指標結果 ・アンケート項目『預かり保育は子育て支援として役立っていますか』 100%の保護者がそう思うと答えられた。 ・預かり保育での，子どもの育ちの姿の検証 以前に比べ，より多く，異年齢児との関わりや，自分たちで問題解決をしようとする姿勢が，みられるようになってきている。 ・預かり保育指導計画の見直しを進める。 日々の記録や週案作成を丁寧に行い，年間指導計画に反映させている。	
自己評価	分析（成果と課題） ・臨時休業中も預かり保育を必要とする家庭の要望に応えることができた。 ・全般的に，預かり保育利用者は以前に比べ増加している。 ・預かり保育時間中の環境構成や，休息と活動のバランスのとり方などの工夫を重ねている。

	分析を踏まえた取組の改善 ・今後，預かり保育時の子どもの姿や課題・育ちについて，他の教職員との連携をさらに進めていく。
	（最終評価に向けた）取組の改善を検証する各種指標 ・アンケート項目『預かり保育は子育て支援として役立っていますか』 ・預かり保育での，子どもの育ちの姿の検証 ・預かり保育指導計画の見直しを進める
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 ・今後さらに，地域にも『預かり保育の実施』について周知できるよう，支援する。

最終評価

（中間評価時に設定した）各種指標結果 ・アンケート項目『預かり保育は子育て支援として役立っていますか』 100%の保護者がそう思うと答えられた。 ・預かり保育での，子どもの育ちの姿の検証 全学年の子どもが，預かり保育での活動の中で，通常の保育とは違う『楽しさ』を感じ，参加を楽しみにしている姿みられ，利用者数も増加している。また特に異年齢児との関わりの深まりで，4・5歳児は自己有用感を，3・4歳児は安心感を高めることができた。 ・預かり保育指導計画の見直しを進める 週案作成や，日々の記録を，利用する子どもたちの実態に合わせて丁寧に行っている。	
自己評価	分析（成果と課題），重点目標の達成状況，次年度の課題 ・就労だけでなく様々な保護者のニーズに応える支援を行うことができている。 ・預かり保育の場面で見せる子どもの姿を共有することによって，より深い子ども理解につなげることができた。 ・頻度は極めて低いが，子どもの疲労度や体調などに応じた利用となっていないことがある。
	分析を踏まえた取組の改善 ・必要に応じて，保護者に子どもの実態に応じた利用の仕方を知らせるようにする。
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 ・預かり保育が就労支援だけではないことを，様々な機会を使って地域にも周知できるよう働きかける。

（４）子育ての支援に関して

具体的な取組 ・一人一人の子どもの育ちの芽を見逃さずに，適切な援助を行えるように全教職員で子どもと関わる。 ・子どもの理解に加えて，保護者の思いも十分に受け止め，必要な子どもへの具体的支援を共に考えていく。その際に『目に見える』成長だけでなく『内面』の成長にも気付けるようにする。 ・未就園児クラスについては，年間の計画や活動内容を示し，活動計画や具体的な活動内容を配布プリントやホームページなどで発信する。 （新型コロナウイルス感染拡大により，開催が困難な時期は，ホームページでの発信や，個別に遊びや子育てのアイデアなどを届けたり相談を受けたりする取組を続ける。）
（取組結果を検証する）各種指標 ・在園児保護者と連携する中での，子どもの育ちを検証 ・未就園児クラスの案内をより具体的で広範囲な発信 ・未就園児クラス内での，子どもとその保護者の『育ち』の検証

中間評価

各種指標結果 ・在園児保護者と連携する中での，子どもの育ちを検証 園で，特に大切にしている『多様性』『自然』『ありのまま』のキーワードを保護者とも共有し，家庭生活の中での具体的な関わりを知らせることで，子どもたちの感性（気づき）や自然物や自然事象などへの関心が高まってきている。 ・未就園児クラスの案内をより具体的で広範囲な発信 ・未就園児クラス内での，子どもとその保護者の『育ち』の検証	
自己評価	分析（成果と課題） ・保護者自らが自然への興味を高めたり，多様性を認めたりする姿がよく見られる。 ・未就園児クラスを対象に，休業期間中も，遊びや子育てのアイデアや教材を届けたり，発信したりした。 ・未就園児クラスの参加者は，隣接学区にも広がってきている。
	分析を踏まえた取組の改善 ・在園・未就園保護者に対しても，子育ての中で大切にしたいことを，発信し続ける。 ・未就園児クラスにおいて，本園での一人一人の子どもたちの育ちと教師の援助などを，より分かりやすく発信する。
	（最終評価に向けた）取組の改善を検証する各種指標 ・在園児保護者と連携する中での，子どもの育ちを検証 ・未就園児クラスの案内をより具体的で広範囲な発信 ・未就園児クラス内での，子どもとその保護者の『育ち』の検証
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 ・地域にも未就園児の取組が浸透してきているが，さらに情報が行き届いていないところがないかを見直し，発信していきたい。

最終評価

（中間評価時に設定した）各種指標結果 ・在園児保護者と連携する中での，子どもの育ちを検証 保護者からの様々な思いを，具体的の捉え，園でできること，家庭と協力して行うこと，家庭での関わり方などについて，具体的に提案した。 ・未就園児クラスの案内をより具体的で広範囲な発信 昨年度同様，学区自治会で回覧をしたり，学区内の教育施設に案内を配布したりする取組に加えPTAの協力も得て，より多くのスポットに未就園児クラスや入園の案内を配架することができた。 ・未就園児クラス内での，子どもとその保護者の『育ち』の検証 担当教員はもとより，園の教職員全体で未就園児やその保護者を『受け止める』姿勢で関わることができた。	
自己評価	分析（成果と課題），重点目標の達成状況，次年度の課題 ・在園児の保護者は，一年間を通して，幼児期においての『自然との関わり』『多様な人との関わり』のについての大切さを実感され，子どもとの関わりの中で生かされている。 ・昨年度に比べ，未就園児クラス出席者数は増加している。 ・未就園児クラスの時期から，水や土と関わること，小さな思いの“衝突”体験をすることなどの大切さを実感された。
	分析を踏まえた取組の改善 ・さらに保護者の思いや実態に寄り添い，今年度は実現が困難であったが，より深い信頼関係が結べるよう，クラス全体や個別での話し合いの機会を増やす。 ・さらに，継続した未就園児クラスの参加を促すための工夫をする。（体重測定や定期的なイベントなど）
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 ・保護者の安定感が，子どもの育ちに大きく結びついていることは痛感している。今後，未就園児クラスや保護者懇談などの機会でも支援できる場面があれば，申し出てほしい。 ・未就園児クラスの周知をさらに広げるために，配下スポットの拡大の援助を行う。

（５）地域との関わり（社会に開かれた教育課程）に関して

具体的な取組 ・園の取組を学区の諸団体にも行事予定などで発信する。 ・運営協議会を中心として，子どもの活動を多様なものにする。（花うりやさん，団子つくり，十石船の乗船，田んぼ遊び，ふしみ祭参加，夏の夕べ，お正月の集いなど）
（取組結果を検証する）各種指標 ・学区諸団体や地域への情報発信の回数や内容 ・運営協議会のご協力で行う活動の取組状況とその中での子どもの育ち

中間評価

各種指標結果 ・学区諸団体や地域への情報発信の回数や内容 ２か月の臨時休業があったにもかかわらず，園からの情報発信の回数は増加している。

<table>
<tr><td colspan="2">内容はより端的に教育内容や未就園児の取組が伝わるような工夫を行った。
・運営協議会のご協力で行う活動の取組状況とその中での子どもの育ち
コロナ禍において，一緒に活動することはできていないが，米の栽培の取組や，日常の登降園時での関わりの中で深めることができている。
特に年長児は親しみや感謝の思いをもつことができている。</td></tr>
<tr><td rowspan="3">自己評価</td><td>分析（成果と課題）
・直接的な関わりの少ない中，心が通い合う関わりは継続して行うことができている。
子どもたちはもとより，保護者の方々にも『地域とのつながり』や『社会の中で育つことの大切さ』などは伝わってきている。
・多人数の地域の方々との関わりはもてないが，少人数での関わり（米の栽培・十石船など）は行うことができている。</td></tr>
<tr><td>分析を踏まえた取組の改善
・今後とも『社会』の中で，子どもたちが育っていくことを保護者と共有する。
・学校運営協議会や地域と関わりにおいては，共に集うことは困難でも，関わり方の工夫をしたり，取組の様子を伝えるなど，気持ちや思いの双方向のやり取りを大切にする。</td></tr>
<tr><td>（最終評価に向けた）取組の改善を検証する各種指標
・学区諸団体や地域への情報発信の回数や内容
・運営協議会のご協力で行う活動の取組状況とその中での子どもの育ち</td></tr>
<tr><td>学校関係者評価</td><td>学校関係者による意見・支援策
・このような想像だにしなかった状況ののもと，『心理的な距離』の緊密さがいかに大切かがよくわかった。
・子どもたちにとっても，この経験がマイナスばかりではなく，プラスの育ちにつながっている部分があると思う。</td></tr>
</table>

最終評価

<table>
<tr><td colspan="2">（中間評価時に設定した）各種指標結果
・学区諸団体や地域への情報発信の回数や内容
今年度は，ほぼすべてのイベントは中止となったが，主に自治連合会を通しての情報発信は年間を通して，6 回以上行うことができた。
・運営協議会のご協力で行う活動の取組状況とその中での子どもの育ち
例年通りの取組が行えなかったものもあるが，新たな形での交流を模索することができた。
その中で，特に年長児は例年通りの体験を重ねたり，違った形での地域への貢献を行うことができた。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">自己評価</td><td>分析（成果と課題），重点目標の達成状況，次年度の課題
・イベントを通してだけではなく，様々な機会を通して，あたたかい地域の方々の存在を感じることができた。
・一か所に集まる人数を少なくするなどの工夫を行い，従来と同じような取組をする中で，子どもたちの自己有用感を高めることができた。
・＊今後の入園者数の見込みなどについての情報を運営協議会で共有した。</td></tr>
<tr><td>分析を踏まえた取組の改善
・来年度は『顔を合わせて』の取組がより多く行えるよう，さらに活動の方法の工夫を行いたい。
・特に＊に関しては，運営協議会を中心に，改善策の協議を深めていく必要がある。</td></tr>
</table>

学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 ・現状では，来年度も通常通りの活動ができる状況とは言い難いが，今年度の工夫をさらに重ね，少人数ずつでも『顔を合わせた』関わりを行っていきたい。 ・＊に関しての協議を行う機会をもつ。

（５）教職員の働き方改革について

重点目標 教職員一人一人が勤務時間を意識し，子どもと向き合う時間を十分に確保する。
具体的な取組 ・保護者や地域に『働き方改革』に対する理解を深める。 ・会議を精選，効率化する。 ・電話応対時間を午後６時までとし，以降は留守番電話に切り替える。
（取組結果を検証する）各種指標 ・教職員の勤務時間の推移 ・年休や特休などの取得率

中間評価

各種指標結果 ・教職員の勤務時間の推移 コロナ禍において，休日や夜間の勤務は大幅に削減されたが，日常の業務は消毒や，新たな取組の立案などで，減少させることは難しい状況にある。 ・年休や特休などの取得率 昨年に比べ，取得率は若干，増加しいている	
自己評価	分析（成果と課題） ・昨年度に比べ，職員数は増加している。園全体で業務の見直しや各自の分担の仕方の見直しをさらに進めていく。
	分析を踏まえた取組の改善 ・園としては，今後『繁忙期』となるが，上記の通り一人一人の教職員が互いの業務を支え合う態勢の構築をさらに進めていく。
	（最終評価に向けた）取組の改善を検証する各種指標 ・教職員の勤務時間の推移 ・年休や特休などの取得率
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 ・幼稚園特有の『忙しさ』があることがよくわかる。今後，学校関係者や地域との会合などの見直しも必要となってくると考えている。

最終評価

<table>
<tr><td colspan="2">（中間評価時に設定した）各種指標結果
・教職員の勤務時間の推移
新型コロナ対応や，新しい取組にむけての業務による増加は見られたが，
それ以外の業務に関しては，校務支援員や年度途中からのまなび支援員・コロナ対応ボランティア等の配置により，増加は見られなかった。
・年休や特休などの取得率
平常時以上に体調管理に留意したため，必要な休暇を取得することができた。
また家庭事情による必要な休暇も，取得することができた。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">自己評価</td><td>分析（成果と課題），重点目標の達成状況，次年度の課題
・出退勤システムにより，毎月の勤務時間をチェックし，業務の効率化や優先順位のつけ方，個々の教職員の業務の負担の片寄りの是正を行うことができた。
・教職員が必要と感じた時には休暇を取得することはできたと考えられるが，さらなる『取得率』の向上にはさらなる工夫が必要である。
・教職員一人一人が，常に『一定の時間内に，どれだけ効率的に業務を行うのか？』『保育の充実のために，どの業務をまず優先するのか？』『職場内で，各自がどのように業務を分担するのか？』という意識を高めていく必要がある。</td></tr>
<tr><td>分析を踏まえた取組の改善
・さらなるオンラインシステムの活用，ICT を用いた情報管理の効率化，教職員間や幼稚園間での必要な情報の共有などを意識し，勤務時間の削減を図る。
・保護者や地域にも，教職員の勤務時間削減が，より豊かな教育活動につながることを，具体例を通して発信できるようにする。
・電話応対時間を午前８時～午後 6 時までとし，以降は留守番電話に切り替える。</td></tr>
<tr><td>学校関係者評価</td><td>学校関係者による意見・支援策
・『子どもや保護者のために‥最善を』をいう考えは変わらないし，どの取組も大切であるが，今後思いきって取捨選択することも必要となってくる。
・業務の効率化のためのサポートが必要な場合は申し出てほしい。</td></tr>
</table>